

南禅寺福地町における近代の景域形成に関する研究*

The Formation of the Realm after Development in the Modern Era - The Case of *Nanzenji Fukuchi-Cho* - *

出村嘉史**・川崎雅史***・樋口忠彦***

By Yoshifumi DEMURA**・Masashi KAWASAKI***・Tadahiko HIGUCHI***

1. 研究の背景と目的

歩いて楽しい領域があるということは、都市の大きな魅力の一つである。こういった領域が成熟すると、散策のみならず様々な愉しみの活動・文化が生まれることもある。このような場所における景観は、定点的な経験、あるいはスナップショットのように記憶されると考えるのではなく、場所そのものとして領域的に捉えた方が適切と考え、これを「景域」と呼ぶことにする。京都では、都市に極めて近い位置に山辺を有するが、この一帯では、敷地を超えた大きな領域において、山とまちの均衡を慮りながら丁寧に開発された佳良な景域が多く見られる。

本論は、現在も京都の景勝地である南禅寺周辺地域の一角、福地町を中心とする領域を対象とする。近代における開発の中で培われた景域の形成プロセスと、空間構成を明らかにし、作られた景域を評価することを目的とする。

2. 景域の構造的変化の三段階

(1) 塔頭領域の上地

南禅寺福地町の領域は、南禅寺境内の南にあたる(図1)。13世紀に創建された南禅寺は、東山の扇状地の上に境内を展開し、近世中期には32の塔頭が属していた。明治維新前後の領域構成については、古地図や文書の情報¹⁾をもとに、図2のように再現できた。すなわち近世末期の対象領域は、概ね4つの用途(塔頭、塔頭への道、林、農地)から成っていた。この領域は、南に東海道と接する位置にあるが、塔頭と東海道の間には道がなく、幅を持った林

が図3のように存在していたことによって、境内と街道が隔てられていたと考えられる。その後明治6年(1871)の上知令によって、南禅寺領は大幅に削減され、取り潰された塔頭の敷地は売却されて個人あるいは法人の所有となった。

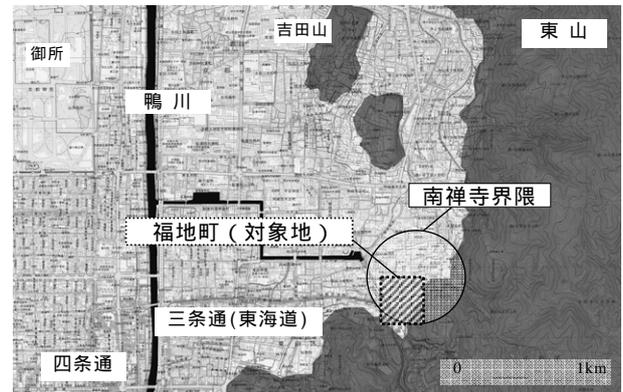


図1 山辺扇状地に立地する対象領域

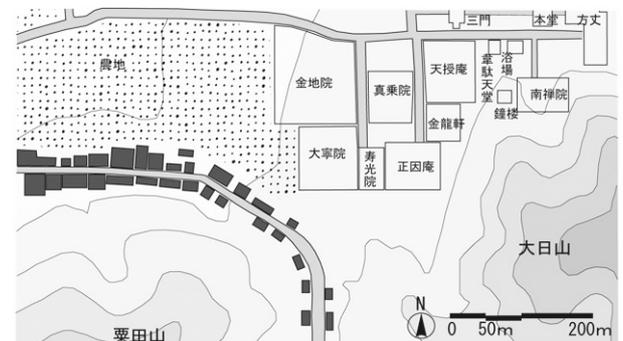


図2 近世末期の南禅寺福地町周辺の領域構成

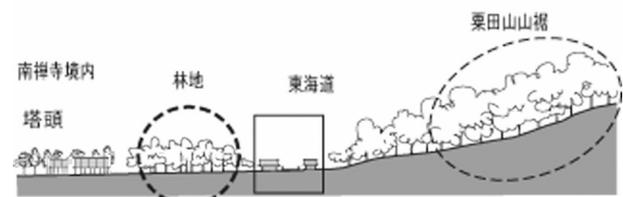


図3 近世末期の福地町と南側の接続

*キーワード：景域，近代，南禅寺福地町，琵琶湖疏水

**正会員，博（工），京都大学大学院工学研究科

（京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-5123

e-mail:demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

***正会員，工博，京都大学大学院工学研究科

前頁図2に見られる大寧院，寿光院，正因庵の塔頭の敷地がなくなった後，これらへ繋がっていた南禅寺伽藍からの道が延長され，林地を通り東海道（三条通）まで繋がった．南禅寺と街道との間に発生した往来によって，アノニマスに経路ができていったものと考えられる．

(2) 琵琶湖疏水の建設と新たな開発

明治23年(1890)に琵琶湖疏水が竣工したが，この一環としてインクラインが福地町に近接して設けられた．インクラインは日岡峠を抜ける蹴上船溜（第三隧道の西口前）から南禅寺船溜まで船を上下に運搬する傾斜鉄道であるため，一定の勾配(1/15²)になるように大規模な土手が築かれた．またインクラインの竣工と前後して，琵琶湖疏水の機能に「発電」の用途を加えるため，インクライン周囲の大きな勾配を利用して，発電所まで導く水力水管と周辺施設が設けられた(図4³⁾)．福地町において，これらのための用地とされたのは，先に見た林地や廃寺となった塔頭の領域であった．

注目すべきは，このような大規模インフラ施設の建設に隣接する領域に大きな空間構造の変化があったことである．先の図4あるいは竣工前年に発行された都市計画地図(図5⁴⁾)から，前時代に発生したと考えられる南禅寺と街道をつなぐ経路が，インクライン建設計画の中で考慮されていた事が分かる．実際，インクライン工事にかけられた経費44,107円41銭9厘のうち1809円44銭7厘がこの道を通すための「人道隧道費」に充てられ⁵⁾，図6の煉瓦による意匠のアーチトンネルが設けられた．その後，確定された道を軸として，南禅寺境内に残された金地院などの塔頭群と，竣工したインクラインの土手との間の領域が開発され始めた(図7⁶⁾)．

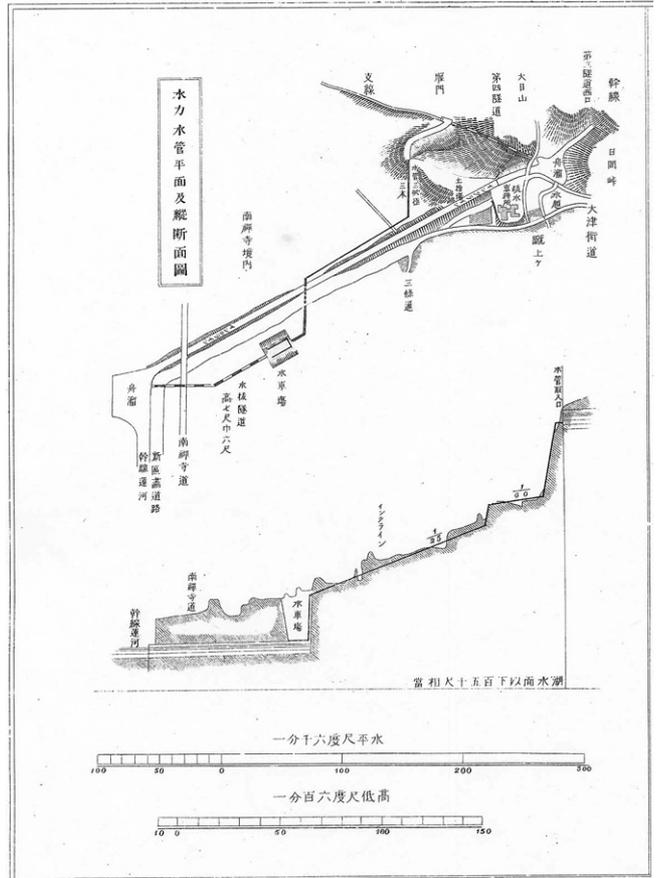


図4 インクラインと水力発電施設



図5 インクライン計画路線と交わる道



図6 インクライン下の「人道隧道」

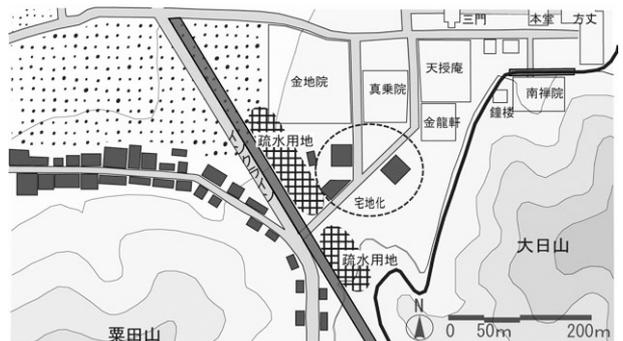


図7 インクライン竣工後の領域構成

(3) 宅地領域の充実

南禅寺山，大日山や，粟田山などに囲まれた南禅寺境内にあって，残存する塔頭群と東海道（三条通）の間に挟まれた領域は，先のインクラインと周辺施設の建設により，その外部からさらに深く圍繞された場所となった．琵琶湖疏水の竣工以来，水の供給される開発適地となった東山地域⁷⁾の中でも，この特殊な場所はいち早く宅地開発が始められた．

京都地方法務局本局所管の「土地台帳」と「旧公図」をもとに，明治25年（1892）から昭和25年（1950）までの対象地域における土地所有の変遷を図8にまとめた．明治25年においては，大きな土地を占める疏水用地をはじめ，塔頭群と疏水用地の間に，幾つかの私有地や農地が見られる．その後明治38年から大きな敷地面積を所有した和楽庵（図中黒塗部）は，実業家の稲畑勝太郎の住居であった．

稲畑勝太郎は，明治23年に染物で成功した人物であり，国際的な交友関係が知られている．和楽庵の造営は，居住の目的とともに，京都遊覧中の外国の要人を招いて宴席を設けるなどの，外交活動の場とすることも意図されていた．また，勝太郎の妻であるトミが京都音啓蒙運動の支援者であったことから和楽庵は京都の音楽活動の拠点ともなった⁸⁾．

3. 領域要素と接続部の構成

(1) 主要な領域要素

図8の平面図が示しているように，開発期を過ぎた対象地域を構成する敷地としては，塔頭，疏水用地，住居の敷地が，その大部分を占めている．そして，以上に見てきた開発の過程の中で，それぞれの内部において特徴のある空間が創出されてきた．

塔頭の敷地は，近世に存在した多くの塔頭のうち残されたもので，その空間構成の大部分は近世から続いているものである．内部には高木が多く植栽され，粟田山と大日山からの連続性が演出される．

疏水用地は，先に示したように主に，インクラインと発電用水力水管（図9⁹⁾）のための敷地である．どちらも近代になって登場した巨大建造物であるが，例えば大正4年（1915）発行の『京都名勝誌』で「東山巡り」の行程の中にインクラインが紹介されている¹⁰⁾ように，物見の対象ともなっていた．

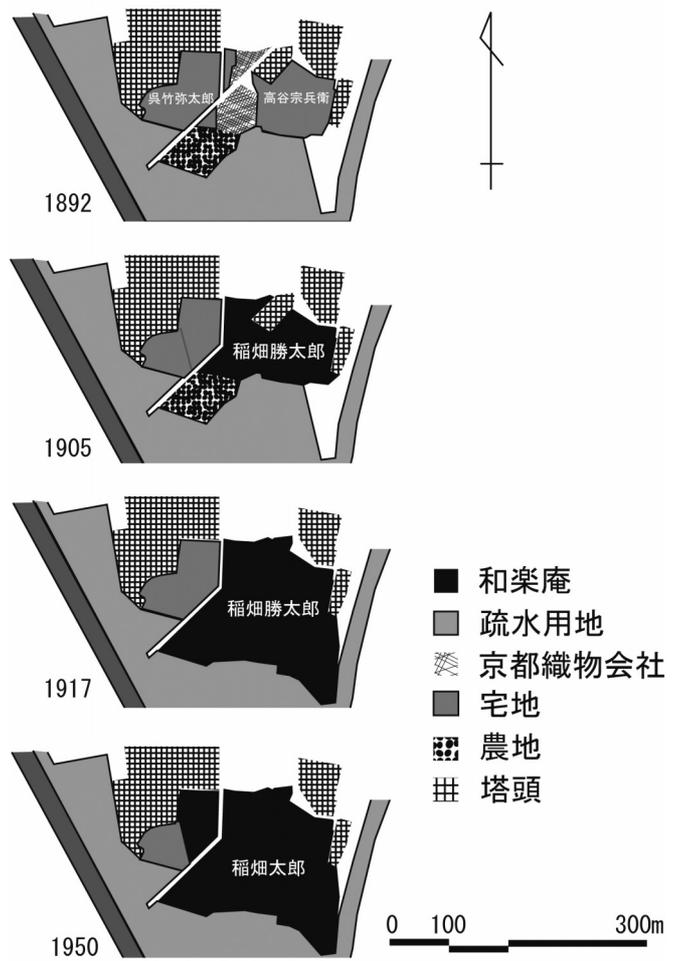


図8 対象地域の土地所有変遷と和楽庵の敷地



図9 インクライン（左）と水力水管（右）

そして，住居の敷地では，各々疏水から得る水を用いた遣水庭園が造営された．とくに和楽庵は，地形に特徴がある．敷地は概ね上下二つの平場と，その間の傾斜部分で成っている（次頁図10¹¹⁾）．この傾斜部分は，最大部では1/2を超える急勾配であり，この部分を激流が流れる構成である．

(2) 接続部となる道の構成

以上の主要な領域要素がそれぞれ接続している部分，すなわち全領域の敷地配置上の軸となっている歩行者道に沿った周辺の構成に着目すると，対象地域全域の構成上の要が明らかになる．

この道は，塔頭敷地の間においては，低い石垣に

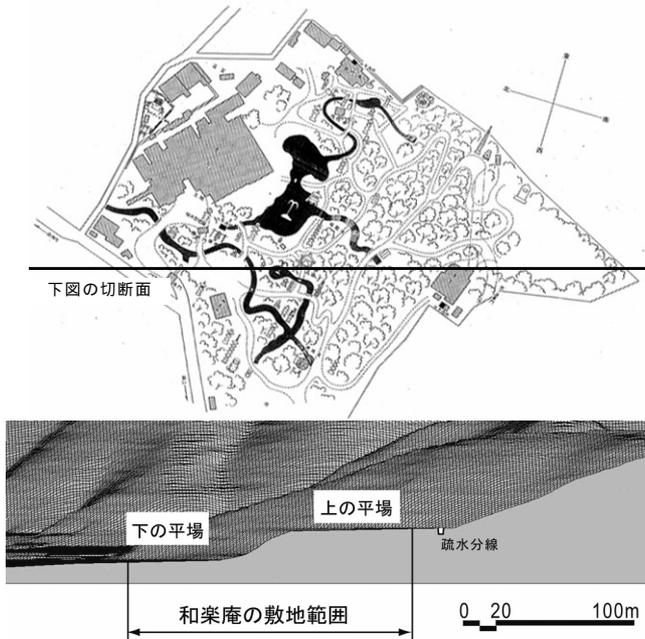


図 10 和楽庵平面図(上)と地形断面図(下)



図 11 同じ道の塔頭沿い(左)と住居沿い(右)

乗る瓦屋根付きの白い塗り壁で囲われて、幅 0.6m 程の存在感のある水路に沿って真っ直ぐに南北に走り、住居敷地の間においては、生垣に囲われ幅員が先の半分になり、東海道を垂直に交わるように一度 45°程屈曲している(図 11)。塔頭沿いの部分は、近世に寺院領域として形作られているために、統一的にデザインされたと考えられる。注目すべきは、そこから延長された住居沿いの部分が、敷地の外に向けて統一的に生垣で揃えられ、塔頭の塀の内部を思わせるデザインとなっていることである。

さらにインクラインの基礎部分の土手にデザインされた「人道隧道」のアーチは、東海道を外部として対象地域一帯を内部とする門として働いており、金地院前の門と、このアーチの間全体の囲繞性を高めている。このインクラインの保護的役割によって、巨大な土手に違和感はない。

(3) 作られた景域

図 12 に主要な領域要素が地形の中における位置づけを示した。この図からも、軸となる道の存在が

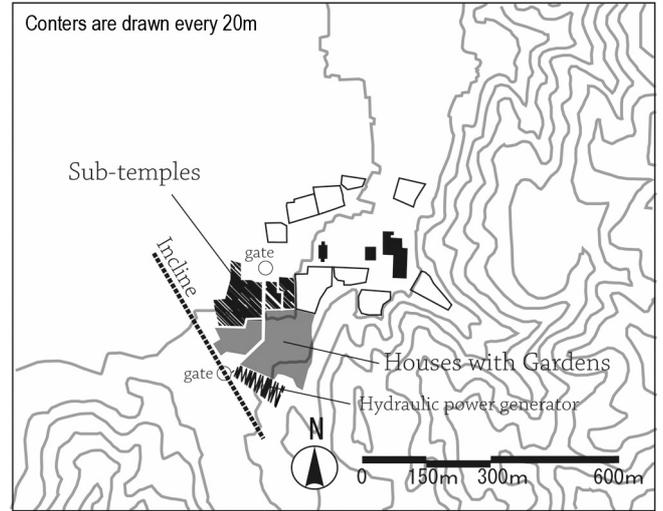


図 12 周辺地形と形成された景域

確認できる。この道自身が周囲の敷地の特徴に合わせてデザインされている。特に塔頭の領域と、住居(広い庭園)の両者は、沿道の水路やそれぞれの庭園の園地において、疏水から得られる水を共有している。さらにインクラインの規模を利用し、外部と繋ぐ象徴的なアーチとしたことにより、景域全体に囲繞性による一体感を与えた。

4. 結語

この領域デザインは、そもそも自然地形により備わっている囲繞性と、寺院境内の静謐さをテーマに、巨大インフラストラクチャーをも積極的に景域の要素の一つとして含み込むものであった。さらに、現在ではインクライン跡と水力水管(現在も稼働中)周辺が植栽豊かな公園になっており、樹々の色づく季節には人の集まる名所となっている。

参考文献

- 1) 『慶長昭和京都地図集成』(大塚隆, 柏書房, 1994.6), 「京都3千分1地形図」(都市計画京都地方委員会, 1922-1929), 「地形図京都」(参謀本部陸地測量部, 1889)等
- 2) 田辺朔郎『琵琶湖疏水工事図譜』(村上勘兵衛, 1891.11) p.20
- 3) 前掲『琵琶湖疏水工事図譜』 p.18
- 4) 「京都3千分1地形図」(都市計画京都地方委員会, 1922)
- 5) 田邊朔郎『琵琶湖疏水要旨』(丸善株式会社, 1920.10) p.121
- 6) 明治25年の「土地台帳」, 「旧公図」をもとに作成
- 7) 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」(『日本建築学会計画系論文集第507号』1998.5) pp.213-219
- 8) 高梨光司『稲畑勝太郎君傳』(稲畑勝太郎翁喜寿記念記編纂会, 1938.10)
- 9) 左は前掲『琵琶湖疏水工事図譜』, 右は筆者撮影
- 10) 『新撰京都名勝誌』(京都市編, 1915.10) p.63
- 11) 平面図は何有荘パンフレット(発行年不明)より抜粋, 断面図は筆者作成